

ピアノ演奏の音楽的表現力向上における実践 —「歌う」学習を取り入れて—

前田 菜月

(人間学部子ども学科)

Practice in improving musical expression of piano performance - By incorporating the learning of singing -

Natsuki MAEDA

(Department of Child Studies, Faculty of Human Sciences)

ピアノ演奏は日常で経験の少ない体や指の動きをするため、細部まで音楽的表現を持った演奏をする事は難しい。特に初心者を含んだ学習者は、ミスなく演奏するという事に重点を置く、もしくは音楽的な表現を持った演奏をするよう考えるが体が硬くなり、音楽的に考えた自分の意思とは真逆の非音楽的な硬い音楽となることがある。できるだけピアノ演奏でも表現を欠くことのない、音楽的な表現を自然にでき、さらに表現力を向上させ、習慣にしたい。そこで、15名の大学生、小学生、幼稚園生において、旋律を実際に音楽的に「歌う」行為の後、ピアノで弾く、または歌いながら弾く、という学習方法を取り入れた。質問、感想を聞き、それぞれの学習レベルや年齢による様子、音楽的表現力の向上において、比較、分析をし、この学習が学生や幼児における音楽的表現力の向上に生かせるか、また、表現活動ということの向上につながるか考察した。結果は年齢によるが、「歌う」という行為をすることで、演奏時により音楽的な表現をする意識の向上が見られ、また、自身でも音楽的表現力、表現活動の向上を実感した学習者が多かった。

キーワード：音楽的、表現、歌、旋律、意識、音楽的表現力

はじめに

ピアノ演奏は日常で経験の少ない体や指の動きをするため、細部まで音楽的な表現を持った演奏をする事は難しい。特に初心者を含んだ学習者は、いかにミスなく演奏するかということに重点を置き、音楽的な表現については後回しになりがちである。または音楽的な表現を考えずに強弱のみをぎこちなくつけて演奏、もしくは音楽的な演奏をするよう考えるが体が硬くなり、自分の意思とは真逆の非音楽的な硬い音楽となることがある。これは、初心者だけでなくピアノ演奏経験者でもよく起こる。

そして著者がピアノ演奏を指導する保育士・幼稚園教諭養成課程の大学生、そして習い事として学習する小学生、幼稚園児にもいえることである。

保育士・幼稚園教諭養成課程の音楽実技の授業には、ピアノ実技実習があり、短い期間で技術を習得せねばならない。

平成30年度の新学習指導要領の幼稚園教育要領のねらいの表現には「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする」とあるように学習した内容は後に音楽を通して表現することを幼児に伝える手段になる。ピアノ演奏学習という非常

に高度な技術の中でも、音楽を通して充実した表現を経験し、できるだけ表現力を身に付け、自然に感じ、習慣になる学習をさせたい。

また、幼稚園児や小学生は、ピアノの演奏、音楽を通して表現するということを実感、経験し、豊かな感性をのばす学習をさせたい。

本研究では15名の大学生、小学生、幼稚園児において、演奏する曲の旋律を実際に音楽的に「歌う」という学習方法を取り入れた。それぞれの学習レベルや年齢による様子、音楽的表現力の向上において比較し、学生や幼児における音楽的表現力の向上に生かせるか、また、表現活動ということの向上につながるか考察する。

1. 研究の目的

音楽的な表現とは、テンポ、強弱、リズム、拍感、スラーなどアーティキュレーション、旋律、ハーモニー、そして曲の細やかなニュアンスを音色、音質などで表現することである。

ピアノ曲の演奏においては、1曲を全体通した大きな視点と、短いフレーズにおいて、音を弾くということだけでなく、西洋音楽の基本に沿ってこれらを考えて弾くこと、となる。

一般的なピアノ演奏指導の場では、音楽的な表現がないと口頭で指摘、もしくは指導者が演奏して見せ修正するが、前述のように、学習者はミスなく音を弾くということに重点を置き、音楽的な表現については後回し、もしくは意思とは真逆の非音楽的な硬い音楽になりがちである。

しかし、ピアノの音楽は直接表されていないものを具象化するために、ピアノもしくは音というものを使っているため、表現をすることが「音楽」「ピアノ演奏」であり、ピアノ演奏で音楽的表現をせずに弾くことは、本来はあり得ないはずなのだ。

このような根本的な音楽のあり方、考え方を自然に感じつつ、音楽的な表現力を向上させるということ、身近にできるような学習が必要である。

また、本学の保育士・幼稚園教諭養成課程の学生の中には初心者から、ピアノ演奏を学ぶ機会のある学習者までおり、それぞれにきめ細やかな学習が必要である。(小林・前田,2012)これは習い事とし

てピアノを学ぶ学習者にもいえる。

この点をふまえ、音楽的表現を、「弾く」という行為の難しさから解放しながら楽に学習し、その後、ピアノ演奏にとりいれることが可能な学習が必要である。

ピアノ演奏において音楽的な表現をすぐに理解して身につけることについて、正しい音楽的な表現と美しい演奏のために、鈴木(1966)は「母語教育法」という、母からの正しい発音を聴くように、正しく美しい音楽を繰り返しレコードで聴くことで、学習者の弾きたいという気持ちと、正しい音楽的表現を身につけることができるという学習方法を勧めている。また、戸川(2016)は、ピアノ学習者が正しい音楽的な表現をするために、旋律などのリズムやフレージングに合う、学習者自身が考えた言語や文章に置き換えて、歌詞のようにして歌い、正しいリズムやフレージングを認識し、ピアノ演奏において生かすという練習方法に効果を認めている。

本研究では、2人の「繰り返し音楽的演奏を聴く」「歌う」というそれぞれの提言の一部を取り入れる。

音楽的な表現をつけ演奏することは、楽器などの演奏指導において「音楽的に表情豊かによく歌わせて演奏する」というふうにも言われる。音楽的な表現を欠いている部分を、イタリア音名、もしくは、ラララなどの擬音語によって、実際に声に出して音楽的に「歌う」ことで指導者から示し、学習者がそれをまねして「歌う」、ということを取り入れ、歌って音楽的な表現を実践してからピアノで弾いてみる、歌いながら弾いてみる、という流れの学習方法を取り入れた。

初心者でもピアノ演奏の技術的なことから離れ、音楽的な表現をすることを身近に学ぶことができ、またすぐピアノ演奏することを繰り返すことで音楽的表現の豊かなピアノ演奏となるよう習慣づけること、同時にこの学習により、音楽の中で表現活動を習慣、向上させることを目的とする。

2. 対象及び方法

(1) 対象と期間

保育士・幼稚園教諭養成課程の初心者、経験者を含む15名の大学2年生(女性)、習い事としてピア

ノ学習をしている小学5年生（男子）、幼稚園年長児（女子）の2名を対象として行った。

場所は、大学生は本学のピアノ実技の授業の行われているレッスン室、小学生と幼稚園児は神奈川県音楽教室にて行われた。

調査対象の期間は、大学生は2017年の5月から7月までの音楽Iの授業のピアノ実技実習の時間内、1週間ごと、10回にわたって行われた。1回の授業はマンツーマンで行われ、一人当たりの時間は平均15～20分である。

小学生と幼稚園児は、同じように2017年5月から7月までのピアノのレッスン内、1週間ごと、12回、一回のレッスンはマンツーマンで行われ、一人当たりの時間は平均40分である。

ピアノ演奏経験者の内訳は、大学生14名、小学5年生、うち、大学生4名は大学の授業など含む1年半以下のみである。大学生1名はピアノではない別の鍵盤楽器演奏経験者、幼稚園児1名はピアノ演奏を初めて1か月の初心者である。

詳細は表1である。表1のA～Oは大学2年生、Pは小学5年生、Qは幼稚園年長児である。

対象曲と難易度の欄には、倫理的配慮より、曲目を書くと個人が特定できてしまうため、今回調査対象とした曲と、その曲の難易度がわかるように記入した。以下にその分類を説明する。

まず、この欄に書いてあるバイエルとは、『バイエル教則本』のことである。授業で初心者に教本として使用している、難易度が最も低いピアノの初心者に使える本である。

ブルグミュラーとは、『ブルグミュラー25の練習曲』のことである。また、「ブルグミュラー前半」とは、この曲集の作品番号の前半で、1ページの、この曲集の中では難易度が低い作品のことを指す。「ブルグミュラー中間」はこの曲集の作品番号の中間で、2ページの曲も含む、曲集の中では中程度の作品、「ブルグミュラー後半」とは、この曲集の作品番号の後半で、曲集の中では難易度が高い作品のことを指す。バイエルの後半の難易度に近いものがブルグミュラー前半となる。

そして、ブルグミュラーの後半曲に比べて音楽的にも演奏技術的にも少しレベルを高い、ロマン派の小品も合わせて調査した学生には「ロマン派・ソナ

チネ」とした。

さらに曲の内容も、音楽的にも技術的にも難易度の高い曲を調査した学生は「ロマン派・ソナタ」「ロマン派・近現代」とした。この2つの違いは対象とした作品が違ったため、難易度としては等しい。

(2) 研究の手順

短いフレーズにおいて、音楽的表現の中で少なくとも強弱、拍感、スラー、スタッカート、音の上り下がりによる変化などについての指導をする(図1、図2)。

手順は、①ピアノで曲を演奏中、対象の学習者の演奏に音楽的表現がついていない短いフレーズを、何も言わずに再度弾かせる。②その後、それでも表現のない演奏の場合、指導者が問題の箇所を口頭で指導、ピアノで音楽的に、表情豊かに演奏して聴かせる。③その後、再度弾かせても表情豊かに弾けない場合、その部分を指導者が今度はピアノ演奏ではなく、声で音楽的に表情豊かに歌ってみせる。④同じように学生にも歌うよう促す。⑤音楽的に表情豊かに声で歌うことができる、もしくは治すため「③」及び「④」を2～3回繰り返した後に、歌いながら、



※全音楽譜出版社『ブルグミュラー25の練習曲』より
「21. L'harmonie des anges(天使の合唱)」抜粋

図1 ブルグミュラー「天使の合唱」と音楽表現



※春秋社『メンデルスゾーン集2 無言歌集』より
「Op.30, No.6 Venetianisches Gondellied(ベニスの舟歌)」抜粋

図2 メンデルスゾーン「ベニスの舟歌」と音楽表現

表1 対象者のピアノ経験状況など

対象者	ピアノ経験など	レベル(教本など)	対象曲と難易度
A	大学授業1年～	バイエル～	バイエル ブルグミュラー前半
B	幼児期短期 大学授業1年～	バイエル～	バイエル ブルグミュラー前半
C	高3の10月～ 大学授業1年～	バイエル～	バイエル ブルグミュラー前半
D	大学授業1年～	バイエル～	ブルグミュラー前半
E	6才～	ソナタ～	ロマン派・ソナタ
F	3才～高3	ソナタ～	ロマン派・近現代
G	4才～中3	ソナチネ～	ロマン派・ソナチネ
H	～小学生	ブルグミュラー～	ブルグミュラー後半
I	4才～中1	ブルグミュラー～	ブルグミュラー中間
J	4才～中3	ソナタ～	ロマン派・ソナタ
K	幼～中1	ソナチネ～	ロマン派・近現代
L	幼～高3	ソナタ～	ロマン派・ソナタ
M	小～中3	ソナチネ～	ロマン派・ソナチネ
N	～高校 (別の鍵盤楽器)	ブルグミュラー～	ブルグミュラー中間
O	小1～	ソナタ～	ロマン派・ソナタ
P 小5	小1～	ブルグミュラー	楽しき農夫 乗馬
Q 幼年長	幼年長～	初心者	ちょうちょ キラキラ星

もしくは頭の中で歌いながら、歌い方と同じ音楽的な表現になるようピアノを弾かせる。⑥「⑤」を2～3回繰り返した後、問題の箇所をピアノ演奏で通して弾いてみる。⑦学生の感想を聞く。という流れで行った。

このように、指導者がピアノ演奏において音楽的な表現を欠いている演奏部分について指摘し、学習者に再度弾かせても音楽的な表現を欠いている場合のみ、実際に指導者が音楽的に表現をつけて「歌う」ことを聴かせ、学習者にも同じように歌わせ、その後ピアノで弾く、または歌いながら弾く、という学習方法を取り入れた。

指導後に質問、意見を聞き、それぞれの学習レベルや年齢による様子、音楽的表現力の向上において比較をし、学習者におけるピアノ演奏の音楽的表現力の向上に生かせるか、また、表現活動ということの向上と習慣につながっているかを分析した。

(3) 倫理的配慮

音楽教室で行った実践では、16歳未満であることをふまえ、保護者に調査の依頼として、この学習を取り入れることによって、音楽的表現力の向上につながるという目的と、調査の期間、調査の方法、を説明し、予想される効果、学習中に子どもが「したくない」となった時は即座にこの方法を取りやめること、また個人を特定できないよう配慮することを説明し、文書によっても承諾を得た。対象となる生徒自身に対しても、同じ内容を話し、配慮を行い実践した。

大学生を対象とした調査においても、実践前に目的、方法、予想される効果等を伝えたくて、この方法が無理な場合は即座に取りやめることが可能ということも含め事前に同意を得た。またこの方法を受けかどうかにより、成績に反映されることはなく、個人を特定できないよう配慮することを説明した。

3. 結果

(1) 音楽的に声を出して「歌う」ことを行えたか

まず、この調査において、一般的にピアノ演奏の指導の中で実際に声を出して歌うということは著者自身の経験にもなく、また他の指導者が行ったということも聞いたことがないため、学習者が声をきちんと出して歌うか、音楽的に歌いそれがピアノ演奏に変化をもたらすかという調査の前段階の時点で、調査が成り立たない不安があった。

しかし、一部の大学生を除き、調査の始まった5月頃は多くの学習者が一様に恥ずかしがりながら歌うことが多かったが、慣れてくると歌う準備ができしており、真面目に取り組む学習者が多く、中には楽しんで歌う学習者も見られた。

(2) 調査中の学習者の発言、感想と行動

最終的に3か月間の総合的な結果を表2に表した。それらを見ながら学習者の発言をとりあげたい。まず、歌うということについて、調査の初期、多くの学習者が指導者の指示に従い、恥ずかしがりながらも「歌う」ということを何も言わずに行った。学習者Bは「恥ずかしい」と連呼しながら真面目に歌っ

た。またEは、「歌う」行為をみせ「歌ってみよう」と指示したが、何も言わずにピアノの演奏の中で表現をつけて「歌う」と解釈したかのようにピアノを弾き出した。その後も結果的に意図は伝わったが歌わなかった。Oは恥ずかしいらしく、「そんなこと絶対にしません」と恥ずかしそうに最後まで歌うことを拒んだ。

表2 音楽的に「歌う」とピアノ演奏の変化

対象者	音楽的に歌えたか	ピアノ演奏で音楽的表現の努力したか ○△×	この調査以降のピアノ演奏の変化
A	真面目に歌えた	○	演奏に少し反映
B	恥ずかしがりながら真面目に歌う	○	演奏でも表現できた
C	楽しんで歌えた	○	試験では思いすぎ空回り
D	真面目に歌えた	○	演奏でも表現できた
E	歌わず	○	表現が硬かった
F	真面目に積極的に歌えた	○	演奏でも表現できた
G	真面目に歌えた	○	演奏でも表現できた
H	消極的だが歌えた	○	表現できた
I	真面目に積極的に歌えた	○	表現できた
J	真面目に歌えた	○	演奏でも表現できた
K	真面目に歌えた	○	演奏でも表現できた
L	真面目に歌えた	○	演奏でも表現できた
M	真面目に歌えた	○	演奏でも表現できた
N	消極的だが歌えた	△	演奏に少し反映
O	歌わず	○	本人なりに表現、歌えた
P	恥ずかしがりながら真面目に歌う	○	演奏でも表現できた
Q	真面目に積極的に歌えた	○	音楽的に表現するということが理解できず逆効果かもしれない

「歌う」行為の後、それを反映させるようなピアノの演奏ができた時に感想を聴くと「よくなった」(A)、さらにもっと大きめに歌うよう促した後に「表現がさらに良くなったと思う」(J)、「表現が良くなったと思う、(強弱が)出しやすくなった」(L)、「表現がうまくいった」(M)、といった感想があった。

毎回のレッスン時を振り返ると、歌っている実感があるかという問いに「頭の中で歌う癖ができた」(L)、同じ質問をするとA、B、F、H、I、J、K、

Mは肯定した。

(3) 「歌う」とピアノ演奏で音楽的に表現するよう努力することの関係

3か月の最後まで、かたくなに歌わずに通した大学生が2名(P,O)いた。しかし、どちらもかなりピアノの演奏に自信があり、今までの経験上歌ったことはなく、指導者側の音楽的な表現を求めていることはよく十分にわかっているが、プライドと恥ずかしさで歌わなかったようであった。結果として、歌わなくても指導者が「歌う」という行為は行ったので、こちらの意図はよく伝わっていたようだ。特にOはこちらの意図を理解しながらも恥ずかしくて歌わなかったことを覆すように、ピアノの演奏の中ではむしろ良く音楽的に表現するような努力と、向上心があった。

一方、中には「歌う」という学習はしたが、むしろか細い声で非常に消極的に歌い、ピアノ演奏のほうにはその努力があまり見られなかった学習者もいた(N)。

その他の学習者はほぼ多くが、中には恥ずかしがっていることもあったが、「歌う」ことに真面目取り組み、ピアノ演奏においても音楽的に表現をするよう、努力が見られた。これは歌わなかったOの学習者と似ているが、「歌う」ことで、大きめに、もしくはピアノ演奏に今まで以上に表現しなければ足らないということが、ピアノとは違う体感によって実感としてよりよくわかったようだった。

(4) この調査以降のピアノの演奏の変化

多くの学生がこの調査により、ピアノの演奏をしている時でも音楽的な表現をしようという努力が聴いている指導者にもよく伝わってくるようになった。表の、「演奏でも表現できた」学習者は演奏の上でも実際に起伏に富んだ表情の豊かな演奏になっていった。

今回の調査の対象の学習者の9割が本当に真面目に取り組む学生で、取り組んだ学習者はほぼ良い方向で音楽的表現力の向上が見られた。

また、表2にはないが、指導の立場として変化を感じたのは、ピアノ演奏において、音楽的に歌えなくても、音楽的に歌おうという意識が芽生えていた。

また、音楽的に歌うことを考えるうち、演奏の中で、音楽的な強弱記号などわかりやすいものについて、よく気を付け、前もって努力する傾向が表れた。そして、音楽的に歌うことで、なるべく歌い切ろうと、つかえることに悔やむケースが増えた。その結果だけとは言えないが、この研究を始めてすぐのピアノの演奏発表の時よりも7月末のピアノの試験のほうが演奏の中でつかえる人が減った。ピアノを練習することは、弾けることが目標でなく、その先の「表現する」ということが目的になっていった。

何より、音楽的な表現が柔軟に自然な流れになったように思う。この調査のすぐ後に大学生はピアノ演奏試験があったが、特に、難易度の高い曲を演奏した、F、Lについては他のクラスの指導者からも音楽的な表現力について、ピアノの演奏が音楽的によく歌えており、その表現力の高さと深さに評価をいただいた。

その中で、何人かは、今回の学習以外の問題を抱えて、この学習を取り入れても反映されなかったものもあるが、それとは別に特異な結果をもたらした学習者についてここに挙げたい。

真面目に歌い、ピアノ演奏でも努力したにもかかわらず演奏の変化が少なかったAは、初心者で、真面目な極度に慎重な性格で、実直に練習するが非常に緊張するタイプである。指摘に対して、極度に緊張しながら非常に真面目に慎重に取り組む。歌う時もその慎重さが出て表現が大らかにできず、演奏に少ししか反映されなかったが、これはA個人で見ると、音楽的な表現力の向上は見られた。

学習者Cはものすごくこの学習を楽しんで取り入れ、演奏にも反映されていた。しかし、この調査の後の試験の時に、人前で、表現しようという強い思いが空回りし、演奏に間違いが起こり、表現も学習時のようにはできなかった。

この傾向とはまた違うが、幼稚園児のQも、ものすごく音楽的に歌うことに積極的に取り組んだが、音楽的な表現というものがまだ理解できずに、必死に指導者の「歌う」ということだけを取り入れ自宅でも練習したようだ。次の週には、音楽的な表現を抜きにした、呪文のようなイタリア語音名付きの演奏になってしまっていた。

そして、歌わなかった学習者Eは、表現が最後

まで硬かった。これは、思いをくみ取ってはいたが、歌うことを拒んだOにも少し見られ、Oは音楽的な表現はのびやかになったが、他のまじめに取り組んだ学習者と比べると、表現力が演奏に反映されにくかった。

結果は年齢によるが、「歌う」という行為をすることで、演奏時も、より音楽的な表現をする意識が見られ、また、自身でも向上した実感を持てた学習者が多かった。

4. 考 察

(1) 音楽的な表現力の向上について

今回の結果を受けて、幼稚園初心者については、音楽的に表現するということをまだわからない、初歩の学習者であった。このように、真面目に取り組んだが、音楽的な表現がわからない状況で行う、もしくは何かのために冷静になれない状況の場合、小学生の例のように音楽的な表現をつけるという真意をわかるレベルでないと効果的ではないことがわかった。もし、同じ年齢でもピアノを習って2年ほどたった、真意のわかる幼児には効果があったかもしれない。

そして、一般的にこの学習の場合、学習者の性格が極度の真面目、恥ずかしさ、慎重さにより、歌う時も音楽的な表現を歌にのせられない人は、効果を発揮されにくいということがわかる。しかしこれも、個人の音楽的な表現力の向上は見られた。

そして、特定の機会、例えば緊張を強いる試験などでもこの学習の効果は見られたが、舞い上がり、思い入れが強すぎ、冷静な思考を保てない場合に効果が得られないことがわかった。本人は歌っているつもりでも、音楽的に冷静に歌えていなかったのかもしれない。これについては特定の機会では結果を捉えるのでなければ、日々の音楽的な表現力は向上しており、また学習を続けることにより特定の機会の結果も変わるかもしれない。

そして、日常から恥ずかしくて歌えない学習者には、頭の中で歌うように指示し、その指示に従った学習者でも、(特に今回はピアノ演奏技術も高かったが)ものすごく表現すること、頭の中で歌うという習慣につながったようだが、指導者の一方的観点

ではあるが、やはり実際歌った人とでは表現力が違った。

これらの結果を見ると、ただ学習者が表現力について非常に気を付けたために音楽的表現力に変化と向上が見られたのではなく、今回の「歌う」という学習が、効果を与えているということが言えるのではないだろうか。

(2) この学習による音楽表現活動について

音楽的な表現というのは、100パーセント表現しきれている状況というのがあるとすると、表現ができていない状態というのは音楽的な表現が理解できていない、もしくは理解はできているが表現しきれていない、浅い、もしくは奥ゆかしい表現ということである。

今回、多くのまじめな大学生、小学生の学習者は、「歌う」ことで、自分たちが思っていたことをもっと、大げさに、ピアノ演奏に、より自分の知った音楽的表現を思いや気持ちでさらに強く表現しなければ足らないということがわかったようだ。

楽譜上に書かれている記号などによって指示されている音楽を表現するというを「歌う」ことで体感し改めて気づきなおしたようだった。それは、ピアノという高度な指の技術にとらわれており、演奏に余裕がなく、表現活動をわずかにしかできなかったからのようだ。

幼児の学習者には、結果的に音楽的な表現がどのようなものか、意識を持って、音楽を表現することまでには至ってはいないし、音楽的表現力の向上とはいえないであろう。

しかし、指導者の指示したとおりに歌い、ピアノの練習に生かす、ということを念頭においての結果で、ピアノを通して積極的にこのように弾こう、歌おう、という意識を持って学習できたことは、それまでの指を動かそう、この曲を弾こう、ということにのみ精一杯だった幼児には、音楽を通して、表現をするという意識の芽生えであり、表現活動の向上と言えるのではないだろうか。

おわりに

結果は、音楽的な表現力の向上という点では幼児

の初歩の学習者には、音楽的ということがわかるような年齢、もしくは音楽的とわかるレベルにならなければ向かない、また学習者によっては年齢ではなく恥ずかしがり、この方法が不向きな点もあった。

しかし、学生は、ピアノ演奏という高度な指の動きからいったん離れ、音楽的に歌うという事を体感することで表現力を向上させようという意識が芽生え、普段から少し言えば音楽的に演奏出来たり、頭の中で歌うようになり、表現することに抵抗なく、表現に重きを置くようになり、ただ音を間違えずに弾く演奏ではなくなった。

より音楽的に表現できたという実感を持つことができ、やる気を感じられる学習者が増え、ピアノ演奏に意欲的に取り組む効果にもなったように思う。

結果として音楽的表現力につながらなくても、幼児のような年齢でも、ピアノの演奏が苦手でも、音楽的な表現を身をもって体感できる、音楽を通して表現をするということを改めて意識し、向上させようという、表現活動の向上に効果的な学習といえると思う。今後もこの学習を取り入れ、経過を観察していきたい。

《参考文献》

- 浅香淳 (1991) 『新訂標準音楽辞典』音楽之友社。
 小林恭子・前田菜月 (2012) 「読譜能力から見る音楽実技指導改善への一考察」『目白大学高等教育研究』Vol.18,pp.17-26.
 鈴木鎮一 (1966) 『愛に生きる』講談社。
 戸川晃子 (2016) 「ピアノ教授法における音符を言葉にする試み - 演奏技術向上への一可能性 -」『神戸常盤大学紀要』Vol.9,pp.43-50.
 文部科学省 (2017) 『幼稚園教育要領』。

なお、本文中の楽譜の出展は以下の通りである。

- J. ブルグミュラー『ブルグミュラー 25の練習曲』(全音楽譜出版社)。
 F. メンデルスゾーン『メンデルスゾーン集2 無言歌集』(春秋社版)。

(受付日:2017年10月31日、受理日2018年1月21日)